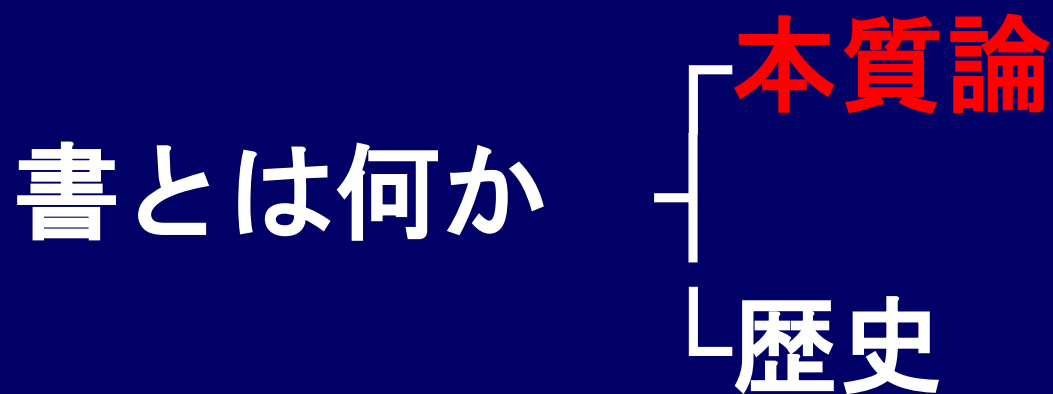


書のみかた

書をどうみるか 本質論から



文字からみた書の3つの側面

視覚性、聴覚性、意味 形・音・義（書法・音韻・意味）

┌書き言葉（文字）→視覚性の発達したものが書
└話し言葉（音声言語）→西洋で発達

書の視覚性（造形性） 3つの側面

点画 （1画の筆触 絵画ではタッチ）

結体 （1字の構成、絵画ではモチーフ）

篆隸楷行草の**書体**

字体の規範と**字形**の自由さ

章法 （字間の構成 絵画では構成）

視覚性からみた書の2つの基軸 時間性、身体性

過程芸術としての書

点画＝^{タッチ}筆触が時間の経過に伴い刻まれていく

（その様子をたとえる様々な用語：

用筆 執筆法 腕法 運筆法

筆意（意在筆先） 筆勢 筆力

遅速、リズムなどの時間、角度 など）

書とは芸術(美)であるか

明治期、日本近代 の初めには岡倉天心vs.小山正太郎の「書は美術ならず論争」があったがいまだに決着がついていない

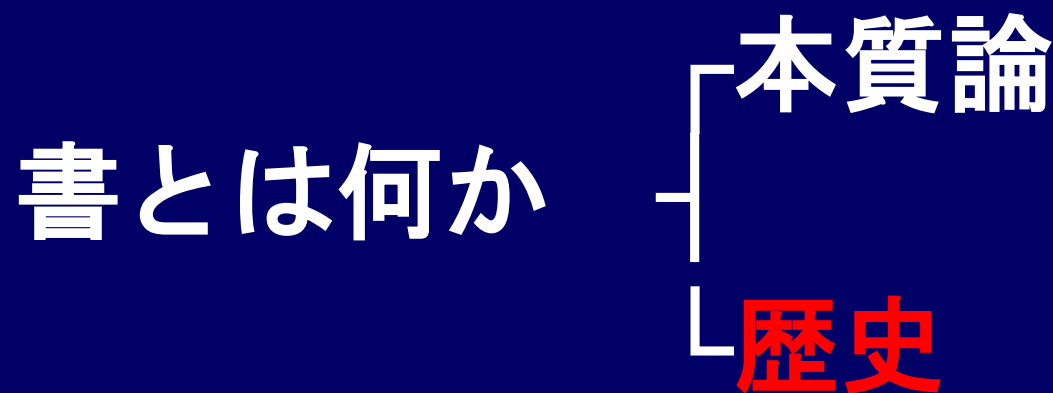
→参照：日本美術史ノートの「日本近代美術の問題」

<http://www.geocities.jp/qsshc/cpaint/syohabijyutu.html>

現時点での仮の結論：

書とは狭義の「美術」でなく、
芸術である

書をどうみるか 歴史から



中国書法史 5つのポイント

問題

篆・隸・楷・行・草の五書体
のうち

最も早くできた書体はどれ？

1. 唐までの書体の創造

篆→隸→草→行→楷の展開

篆書 𠄎 (秦の公用体、多様な書体を統一)

隸書 𠄎 (漢の公用体、波磔(八分)の洗練)

草書 𠄎 (公用体を略した実用書体)

行書 𠄎 (公用体をくずした実用書体)

楷書 𠄎 (唐の公用体、三折法の完成)

2. 4つの時代区分

晋韻 （王羲之、行草書の力のバランス）

唐法 （欧陽詢、虞世南、褚遂良の楷書）

宋意 （蘇軾、米芾、黄庭堅の個性）

元明態 （様々なスタイルの応用）

以上は明末 董其昌、清初 梁巘(りょうけん) の説
（特に楷行草の書体にあてはまる）

参考：唐楷・宋行・明草・清篆

3. 正系と逸脱

正系の流れ(晋**王羲之**の継承)

唐太宗、宋淳化閣帖、元趙孟頫、
明文徵明、董其昌、清乾隆帝など

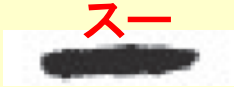

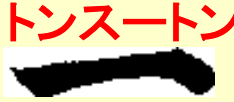




正系からの逸脱 北魏碑、唐顔真卿 禪の墨蹟(藁筆、**かすれ、にじみ**)など

(日本書道史の二重性(唐様と和様)と複雑さ

奈良平安の王羲之尊重、鎌倉以降の墨蹟偏愛)

4. 筆触の展開

- 無折法**  (甲骨文、金文、篆書の筆触)
- 二折法**  (漢の隸書、晋王羲之の行草)
- 三折法**  (唐で完成、楷書の筆触)
- 多折法**  (宋以降、黄庭堅など)
- 無限折法**  (清 八大山人、金農など)
- 石川九楊の説

5. 筆と刀

筆による文字の歴史 「筆触」
(刀のようにとぎすました**肉筆**による書)

↓↑ 相互影響

刀による**刻字**の歴史 「筆蝕」 石川説
(殷周 甲骨文・金石、漢印・漢碑、北魏碑、清**篆刻**)



宋以降：印刷術による活字(タイポグラフィ)の歴史